



第8巻第3号
通巻第87号

阿佐谷住宅最後の桜か？

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番4号 〒166-0015からす新聞本社
からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

今まで隠してきたけれど、私の母は印度人である。こんなことを白状して、国際紛争になつたりしないか心配だが、この際だからもう少しくで打ち明けてしまおう。実を言うと、亡父はスウェーデン王室のさる人物が来日した折に遺した落し崩なのである。つまり、私の体内にはインドの血が二分の一、スウェーデンのそれが四分の一。要するに、自分の三は舶来品であり、日本の血は僅か四分の一しか流れていないのである。長年に亘つて、酒のついでにこんなことをあちらこちらでぼそぼそと呟いたりしてきた。その度に、またまたあ、だの、嘘が下手だねえ、だのと鼻で笑われたり、あるいは、酔漢の戯言に付き合う暇などないとはかりに黙殺されたり。全く以て不思議で仕方がない。いや、それどころか、不愉快だ。どうして人というものには斯様に疑つてばかりなのだろう。童心に帰って、信じ難きものをも素直に受け入れることはできぬのか。東京は恐いところだ、人を見れば泥棒と思え、知らない人についていっちゃいけませんよ、というような教育の成果がここにあるのだから仕方がない、と言えなくもないけれど、まず、疑うところから

始めるなんざ、揃いも揃ってカルテジアンでもあるまいに、全く世知辛い世の中になつたものである、などと長々と文句を言いたくなる。けれども、まあ、しかし、今回のことに限つて言えば、これは盗人猛々しいに類する、居直り強盗みたような発言である。何となれば、そもそも、先の私の出自に関する話は、出鱈目のこんこんちきであり、心の美しい人がいらつしやつてそのまま信じてしまわれたりすると、寧ろ、困る。あ、いや、冗談なんです。下らない嘘吐いてすんません……などと、どきまぎしながら詫言びざるを得ぬことになる訳で、みんなに狼少年呼ばわりされたことは冷静に考えてみればありがたいことで、ああ、良い友たちを持ったものだ、と、大きに感謝せねばなるまい。

それにしても、君という人間は何だつてこんな愚にも付かぬ幼稚な嘘を吐くのだ、と問われたとしても、それに対する答えはない。いつぞやも、高校のメーリング・リストに、最近引退気味で孫と日向ぼっこするのだけが楽しみですよ云々、などという根も葉もない作り話を書いて、お叱りを頂戴したりした。その折にも、何故、私はこんな阿呆な嘘

(最終面に続く)

今日の紙面から

二面

阿佐谷住宅というひとつの文化が終わるついでに。

三面からすライブラリー)
CD『Imaginary Diseases

平成の大改名

からす新聞は××××

が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

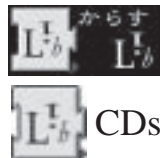
誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。



阿佐谷住宅というひとつの文化が終わろうとしている。

老朽化した建築物を建て替える。それだけのことだと思っ人もいるだろう。けれども、それはひとつの文化、ひとつの時代の終焉だと考える人もいる。人々の様々な想いが交錯する中、終わりの日は着々と近づいている今、この団地を記録に残そうではないか。そんな声があちらこちらから聞こえてくる。からす新聞でも積極的に取り組む所存である。





Imaginary Diseases

Frank Zappa

Zappa Records、2006年、ZR 20001



こいつがアルバムを出したら絶対に買わなきゃならない、ま、私にとってのアイドルのような存在は、さほどたくさんいるわけではない。そんな数少ない中の一人がザッパ大先生である。

今年になってから、早くも新作が二枚。相変わらずの多産ぶり。故人に向かつて多産家というのはおかしな話だけれど、彼が亡くなってから十年とちよつと。その間に、二枚組や三枚組を含む十四枚のアルバムと七枚のベスト・アルバム。死してこれである。今も生きていてくれたら、一体、どんなことになっていた

だろう。それにしても、五十三歳ってのはいくら何でも早過ぎた。

最近、少しザッパの聴き方が変わってきた。以前は、びびりしなところ、きちきちなところを楽しんでいた。それは、ゆるゆるなリズム、ゆるゆるなアレンジのものであつてもそうだった。ところが、近頃、ちよいと変わりましたよ。行間？ 余白？ そんなものを味わう。変かな。変かもな。

(全太)

平成の大改名

安楽死事件の起きた射水市民病院。イミズなんて市あつたっけっかなあ、と最新の地図を見ると、新湊市と周辺2町の合併でできた新市と判明。市名の由来は射水平野にあるから、で納得。一方で、おせっかいながら、それどうなのよって名前も多し。話題になったところだと「四国中央市」とか。東京だって東の京みやこでしょ、同じじゃん、百年も経てば普通ですよ、って言われればそうかもしれないが、中国の首都は北京、日本は東京、といった歴史的重みがあるのも確か。同時代人としては、やっぱり「四国中央」って安易に過ぎる気がする。まあ上には上がいるもので、山梨の真ん中にはスバリ「中央市」ってのが出来ちゃっただけ。

新市名はそれぞれにエゴやらメンツやらをかけた攻防のドラマがあつての妥協の産物なのだろう。横芝町+光町=横芝光町(千葉)みたいなのが多いのかな、と思いきや、そういう例は少ない。串木野市+市来町=いちき串木野市(鹿児島)はちよつとひねって規模の小さい「いちき」を平仮名にして前に出した。なぜ平仮名なのか。親しみやすいからかどうかわからないが、調べてみると、「一度、れいめい(黎明)市」という歴史風土に何のゆかりもない「未来志向」の名前に決まりかけた後、ひっくり返したらしい。

平仮名は、かなり多い。鶴川町+穂別町=むかわ町(北海道)みたいなのが目につくのだが、なぜ漢字をやめてしまうのか。志度町+長尾町+寒川町+大川町+津田町=さぬき市(香川)なんて、立派な旧国名じゃありませんか。「讃岐うどん」より「さぬきうどん」の方が全国的に売り出しやすいとでも言うんですかね。その点、八日市場市+野栄町=匝岐市(千葉)には拍手。射水と同じくそもそもある広域地名をすんなり採用した。読みにくくて書きにくい漢字を残したことは、必ずや後世感謝されるに違いない。さらに私に言わせれば最悪の、その出身でなくて良かったってというのが二つ。伊奈町+谷和原村=つくばみらい市(茨城) 蕨山町+大仁町+伊豆長岡町=伊豆の国市(静岡)

将来なんかの間違いで実家の住所を「ふじみらい」「富士の国」って書かなきゃならなくなったら、本籍移してやる。

(望月)

● あなたの平穏な生活を脅かすストーカーを本場米国で培った最新の技術と装備
● を駆使して退治します。あなた一人
● で悩まないでください。

相談無料
秘密厳守
関西方面
にも強い

ストーカー
バスター

produced by

P.D.Agency

tora@pda.co.jp

4-3-49-1, Suginami-ku,

Tokyo 166-0015, JAPAN

voice : +81-5347-9063

facsimile : +81-5347-9064

(一面から続く)

を無闇に投げ散らかしてしまつたのか、と自問したのであるけれど、それは私が阿呆だから、という再帰的な結論以外には何も思いつけなかった。虚言癖などという言葉があるのだから、癖なんだね、これは。などと思つたりもするけれど、それでは、癖だから仕方ないさ、と言いつく用意するのにも等しく、ますます虚言率が高まってしまふのである。

何の話をしているのやら。私はこれほどに嘘吐きなのですよ、と世間に知らしめることが目的なのではなく、伝えたいのは、嘘を吐けるつてのは、凄いいことなんだぞ、ということ。嘘を吐くという行為は生半ならぬ高度な精神の働きなのであるぞ、と。正直に生きなさい、嘘を吐いちゃいけませんよ、などと幼少時に指導されたけれども、考えてみれば、本当のことを言つたのなんざ、大したことでは

ない。意識的に嘘を吐くとすると、まず、真実を認識した上で、それとは異なることを述べる必要がある訳で、想像力を働かせねばならないのは自明。事実を述べるより、手間暇のかかることであることは歴然である。

そもそも、人は自然状態では嘘を吐くことにはしない。例えば、ああ、腹が減つたなあ、と無意識に呟く時、それは、真実腹が減つている場合である。そんな折に、拙者、腹など空いておりもござらん、などと言ひ張るのは、武士は喰わねど高揚枝つてね、などという屈折した心理が働いているからに他ならない。つまり、虚言野郎の私は、正直者のみさんよりも、日々豊かに想像力を駆使しているべきであり、非難されるよりは寧ろ称賛されるべきではないか、と思つのだが、さて、如何がだるうか。

考えてみれば、私が歌詞を書いたり、文章

を書いたりする場合、全てとは言わないまでも、半分以上は嘘塗り、虚飾塗れなわけです、嘘を禁止されてしまつたら、創作活動が立ち行かなくなるに相違なく、いや、それは困ります。御立腹の方もあろうかとは思つけれど、私に、明日からも嘘を吐かせてください。

しかし、あれだね。嘘を吐く私も偉いけれども、その嘘を見破る君たちは、私以上に偉いのかも。けれど、その偉さは、本を正せば、私が嘘を吐いたればこそであるからして、やはり、私の方が偉いのではないか。こんなどうでもいいことを脳内で飽かず堂々巡りさせている私。見事に阿呆である。けれども、こんなことだつて想像力。想像力……なんだらうか。

(全太)



万年筆なら dani

<http://danijapan.com/>



bar&kitchen kanna

お一人でも気軽に楽しめる、食事もできるShotBarです。ビール、パーボン、焼酎からカクテルまで、豊富なお酒と、季節の素材を取り入れた手作りのオリジナル料理を、4/500円~と手頃な料金でご提供いたします。

木とテラコッタを基調にしたギャラリー風の店内は舞台スタッフの手作り。ぬくもりの中に遊び心が溢れ、くつろげます。作品の展示、音楽、演劇等のイベントも企画スペースの提供も行っておりますので、興味のある方はご相談ください。各種パーティー、打ち上げにも最適です。



Ken-ichi Shinozaki,
architect

Voice : +81-3-3220-0644
Facsimile : +81-3-3220-0640;
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
篠崎健一アトリエ

編集後記
からす新聞第八巻三頁又通巻第八七号へ、無事、発行できました。
新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。
次号発行予定日は二〇〇六年四月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾

ファミマ

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号

03-3379-1451

